

「フィリピン先住民族」との出会いの中で発見した「私」の抱える問題 とそれをめぐる考察

はじめに

本論 1 私は「先住民族」を訪ねようと思った動機

本論 2 私は先住民族と出会えたのか、という疑問

本論 3 「語る」ときの「私」の自己満足

本論 4 国境を越えるということ

結びに

フィリピン科 2 年 7501107

芹澤 隆道

はじめに

このレポートは、筆者が2002年夏のフィリピンに住む先住民族をめぐる旅について書いたものである。旅にでる前から、滞在中の「わたし」、そして帰国後、考えていることを、大きく分けて4章にまとめた。

本論1では、筆者がなぜ「フィリピン先住民族」をめぐると思ったのか、その動機について書かれている。筆者は2002年夏前に、2度ケソン州ルセナ市のアエタ族の村に滞在した。1度目はボランティアワーク、2度目はプライベート訪問であった。しかし、筆者は2度ともアエタ族とではなく、ボランティアワークで知り合ったタガログたちと多くの時間をともにした。帰って後、小川先生から「芹澤君はアエタ族の抑圧に加わった、植民地主義者だ」という批判を受けた。なぜ植民地主義者になってしまったのか、このことについては本論1で詳しく論じていく。しかしこの筆者に対する小川先生の批判こそが、自分のかつての行動を反省し、再びアエタ族を訪ねる動機のきっかけとなった。

本論2では、筆者がどのように各村の中で滞在したのか、ということが書かれている。アエタ族の村をはじめ、筆者はミンドロ島のアラガン族、北部ルソンのボントック族、カリంగా族の村を訪れた。しかし3度目訪問のアエタ族以外の村では、親しく人々と接することができなかった。1つには言語が違うという問題、それからたかが1週間程度の滞在中、人々と本当の意味で出会うのは難しく、ましてや筆者とは構造的にまったく異なる生活空間を生きている人々が相手であり、なかなか共通の話題を見つけるのが困難であった。

本論3では、そのような薄っぺらい出会いしかできなかったのであるが、先住民族との生活をまるで武勇伝として語っている筆者の自己満足の問題について書かれている。筆者はかれらの生活を勝手にアドベンチャー化し語っている。もちろん筆者のような日常からかれらの日常を覗いたら、奇異で珍しい非日常を営んでいるようにみえる。しかし筆者の非日常こそが、かれらにとって日常なのだ。つまり筆者がかれらの生活を非日常だと感じている段階では、かれらをまったく理解していない。それに加えて筆者の武勇伝を先住民族が聞いたら、不快感を抱くと思われる。奇異で面白い先住民族の生活を筆者が勝手に作り上げてしまっているからだ。かれらにとってはごく当たり前のことなのに、筆者のダシとして使われているのだ。

本論4では、日本人を越えるということについて書かれている。この章は他の章とうまくつなげて論じることができなかった。いきなり「日本人を越えること」という、今までまったく論じていないことを取り上げている。しかしこの章は、筆者の希望が書かれていて、その希望なくして学問はやっていけません、ということが書かれている。日本人としていかに自分が洗脳されてきたのか、国家に従う従順な羊として自分が生きてきたのか、を西川長夫の『国境の越え方』によって痛感させられた。そして自分は「日本人を越えるのだ」という想いで、国境を越えフィリピンにきた。しかしそこで目の当たりにしたのは、先住民族の「日本兵による恐怖の記憶」だったのだ。その日本兵の恐ろしさを抱き続けている人たちに対し、「自分は日本人ではないので関係ありません」とは、言えなかった。無

垢に「日本人を越えた」と思っていた筆者は、「日本の歴史」から目をそらすという落とし穴に陥るところだった。歴史を都合のいいように作り変える、忘却するという作業は、昨今の「新しい歴史の教科書を作る会」の作業と酷似しているのではないか。日本人を越えるという想いと日本人を安易に越えられないという狭間に立たされた筆者の立場が、「日本兵による恐怖の話」によって明確化された。以上を踏まえ、本稿は4章にわけ論じていく。

1. 私は「先住民族」を訪ねようと思った動機

筆者が「先住民族」を訪ねようと思った動機は2つある。1つは、なんととっても珍しいものを見にいきたい、私の暮らし、習慣、思考とはかけ離れたところで生きている人々を見てみたい、という思いだ。自称「冒険家」として「先住民族」という言葉自体、好奇心が大いにそそられる。しかしこの「冒険心」も、ずいぶんたちの悪い性格だと思う。「冒険」は、まだ見たことのない「未開の地」に足を踏み入れる。足を踏み入れるだけならまだしも、19C後半の帝国時代には、欧米列強が「われさきに」といわんばかりに、「未開の地」を植民地化していった。土足でかれらの畳に入っていたのだ。

「冒険」、「未開の地」と言うけれども、それは自称「文明社会」に生きている人たちの言葉である。「先住民族」にとって私たちが思う「冒険」、「未開の地」は「日常生活」、「日常生活の場」にすぎないのだ。そもそも「先住民族」という言葉自体、私たちがかれらを一方的に解釈した言葉だと思う。果たして「先住民族」の中の何人が、自分を「先住民族」だと思って暮らしているのだろうか。

動機の2つ目は、筆者は2001年の夏と2002年の冬に、ケソン州ルセナ市の郊外に住むアエタ族を訪ねた。しかし訪ねたといっても、アエタ族と話す時間はほとんど持たなかった。2回とも筆者は、はじめのボランティアワークで知り合ったタガログの人たちと親しく交流した。つまり「文明社会」にこなれているタガログの方が話題も共有しやすかったし、英語が通じるのもあって、楽だったのである。ここで踏まえなければならない社会背景は、タガログとアエタ族の間には隔たりがあるということだ。両者の間で会話がなされることをほとんど見受けられなかった。今年の夏に再びアエタ族を訪ねてはっきりわかったことは、かれらはタガログを警戒していることだ。アエタ族の村に私を訪ねてタガログが入ってきたとき、その場に緊張の糸がはしったことを私は肌で感じた。またタガログがアエタ族に対して、優越感があることはかれらの話の中でちょくちょく見られる。小川先生に「タガログの人たちと親しくなった」と帰って話すと「お前は暇つぶしのためにアエタ族の抑圧に加わったのだ」と痛い一撃をくらった。そこで自分のポジションが、「未開の地」に土足で踏み込んできた植民地主義者と重なってしまったのである。「罪を冒した」という思いがしばらく離れなかった。そして自分の生活も植民地主義者の生活に思えてきたのである。

しかし自分が抑圧的立場にあることを反省というか一種の「懺悔」を繰り返しているうちに、だんだんその作業が単純なものに思えてきた。つまり「お前は抑圧に加わっている」と

言われれば、「はい、その通りです。ごめんなさい」としか言えなかった。しかしここで私はすでに「ごめんなさい」という答えを用意していたのだし、自分の罪としっかり向き合うことの「恥ずかしさ」から、それ以上の考察を放棄していた。しかし「ごめんなさい」と思い続けていると、その作業が単純に写ってくる。つまり私たちの日常生活の豊かさのほとんどが、周辺国を貧しさで成り立っていることから、抑圧的立場にあることの問題の新鮮さがなくなってきたのである。単に抑圧を悪とする一枚岩の解釈ではなく、もっと自分の立場、あるいは先進国の立場を多層的にとらえていくために、再び今夏アエタ族を含めた各地の「先住民族」を訪ねようと思った。

2. 私は先住民族と出会えたのか、という疑問

今夏の夏休みにフィリピン各地に住む「先住民族」を訪ねてきた。しかし今、振り返って思うことは、私は果たして「先住民族」と出会えたのか、という疑問だ。筆者はルセナのアエタ族、ミンドロ島のアラガン族(マンヤン族の一種族)、ポントックのポントック族、カリンガ族を訪ねた。3地域にそれぞれ7日間から10日間ほど滞在した。はじめはアエタ族の村だけに滞在しようと思っていた。そのことを実際にその村で調査している玉置先生に話すと、1ヶ月近くかれらの村に居座ることは、かれらにとって負担であるという忠告をもらった。またほかの先住民族を見ていないうちにアエタ族とだけ関わってしまうのは、アエタ族に対して偏見を持ちかねないという筆者のこれからを考慮したアドバイスももらい、各地の先住民族を訪ねる計画に変更した。

アエタ族とは、3回目ということもあって顔見知りだし、タガログ語をしゃべるので多くの時間をかれらと共に過ごすことができた。しかし他の2地域ははじめての訪問であり、アラガン族はアラガン語、ポントック族、カリンガ族はイロカノ語の方言のポントック語、カリンガ語を話す。このためコミュニケーションが相当、難しかった。アラガン族の何人かはタガログ語をしゃべる。しかしポントック族、カリンガ族はタガログ語をしゃべらない。というか聞くの分かるようだが、しゃべりたくないようだった。自分は「タガログではない、ポントック、カリンガだ」という誇りがあるのかもしれない。たかが1週間程度の滞在で「先住民族」と出会うのは甘い考えだ。結局、私はタガログ語の話す人たちに助けももらった。アラガン族を自分の農場で雇っているフィデール、ポントック、カリンガでガイドしてくれたキナッドはいずれもタガログだし、かれらの仲介、助けなくして「先住民族」の村に入っていくことは無理だった。

アエタ族こそそれなりにコミュニティーの中に入っていたと思うが、その他の「先住民族」は出会ったとうよりも「外から覗いた」という感が強い。

3. 「語る」ときの「私」の自己満足

そんな薄っぺらい出会いしかできなかった筆者であるが、帰ってきた後、周りの人々に「冒険談」を話す口調は、かれらの生活の珍しさ、奇異さをときには誇張し「武勇伝」のよう

に語っている。それは誰に対して語るのか、いつ語るのか、どこで語るのか、という「語り」の問題である。

たとえば「先住民族」のトイレの話である。アエタ族には便器のトイレがある。アラガン族は、大人は茂みなど人目のつかないところ、子供はなんと大小ともに家の中でしてしまう。もちろんくさい。アラガン族の村自体、私たちから見たら相当衛生的に悪い。病気の人もたくさんいる。「かれらは汚いほうが安心する」とフィデールが言っていた。私も「小汚い」格好でできるだけかれらが違和感ないようにと試みたが、やはり限界がある。ポントック、カリंगा族は高度 1200m くらいの山の中にある。かれらもまた茂みの中であるのだが、石や棒を持って用をたさなければならない。家畜の豚が用をたしにいくとついてくるからである。運が悪いと 3、4 匹ついてくる。最中は常に回りながら、豚を石や棒で威嚇しなければならない。背中を見せると襲ってくるかららしい。豚は人糞も食べる、というのをはじめて自分の糞を食べている豚の姿をみて思った。

またポントック、カリंगा族は首狩り族として知られている。首狩りはもう昔の話で今は政府に禁止された、と聞いていたが現在も毎年 10 から 20 人くらい犠牲者がいるようだ。2000 年からポントックとカリंगाの間で民族紛争が起こっている。そのため町の学校に通っていた子供たちも外に出ると危険なため、村の小さな先生も少ない学校に通学している。私がカリंगा族の村を訪れたちょっと前に、小指のない日本人がマリファナを吸い子供たちを虐待していたが、村を離れた後、首を狩られたという話を聞いた。

「人は常に物語の語り手であり、自分の物語と他人の物語に囲まれて生活している。彼は日常の経験を、これらの物語を通して見る。そして自分の生活を、他人に語っているみたいに努めるのだ」(1951 サルトル:64)。そもそも事実とは一体、何であろうか。どのようなメディアを介しても <起こったこと> を再現することは不可能である。事実を表象しようと試みた瞬間に、それはもう事実ではなくなってしまう。人は自分や他人の物語を事実として飲み込み、それを虚構と疑うことなく生きている。社会生活を営む人のすべてが <ほんとうらしい> 虚構の中に生きており、それはあまりにも自明なことなので疑うことは少ない。何かを「語る」ということは、それに価値があるからである。たとえば筆者が大学の友達に今日の朝食に何を食べたかを話しても、価値はない。しかし筆者が入院患者で、家族に今日は何を食べたのかと話をすることは、回復や体調がいいことを示す価値がある。つまりその人が事実をどのように解釈するのかという価値観が、事実をねじまげているのだ。

村の生活で、筆者はかれらとともに川で水浴びをし、洗濯をし、狩りをし、山で生活したことを筆者は周りの人々に語った。筆者は印象的で面白いと感じたことを中心に、自分の冒険物語を語っている。しかし、かれらの生活を珍しいもの、奇異なものに仕立てあげたのは、筆者である。その語りの場を筆者にそのような経験をさせてくれた「先住民族」が目の当たりにしたら、きっと不快感を催すと思う。物語という虚構性によって、わたしは「先住民族」の日常を勝手にアドベンチャー化してしまった。「こんなにもすごいことをしてきた」という自己満足をみんなに示す語り口に優越感がある。そしてわたしの優越感の「だし」

にされる「先住民族」の日常がある。ここにおいてかれらは再び抑圧の対象となる。自分の物語の虚構性を意識しながら、どのような語り口が公平か、という問題を常に頭に入れておく必要がある。しかし公平さを意識するあまり、物語の面白さが薄れてしまうのも納得できない。

3. 「語る」ときの「私」の自己満足

西川長夫の『国境の越え方』は筆者に国境を越えることの希望、あるいは越えなくてはならないという想いを抱かせた本である。そこで論じられている筆者が一番、感銘を受けたところは、文化を国家の単位で区切るのは適切なのか、という問いから始まる章である。「日本文化は虚構である」という西川の主張は興奮した。たとえばわたしたちが日本文化であると思っている茶道、書道などは、明治以降、国民国家として日本が誕生した後、それらが日本文化であると定義されたものにすぎない。想像の「国民国家」共同体は、想像の「国民」を作り出すために、「国民」をまとめる共通のイデオロギーが必要であり、そのイデオロギーを疑うことなく信じる「国民」が必要なのである。わたしたちは文部省検定の教科書で高校まで学ばされてきたのだし、思えば小学校の運動会の練習で行進の練習ばかりさせられたこと、あるいは部活のなかの時には異常なほどの師弟関係、上下関係は軍隊教育の一環であったとも考える。恐ろしいことは、国家によるナショナリズムの洗脳に気づくことなく、勉学に運動に多くの人が励んでいることだ。

なぜ「国境を越えるのか」、それは国境が他国との差異によって成り立ち、その極限に戦争があるからである。「日本文化」は、「フランス文化」、「ドイツ文化」と違うものであるということを主張し、他国の文化を排他することにつながる。そもそも文化を固まった「日本文化」、「フランス文化」、「ドイツ文化」と考えられるのだろうか。現在の多くの国境付近には、どちらかの「国民」に属することなく自由に交流していた人たちが住んでいた。しかし国境によってその人たちの生活は分断され、「国民化」されたのである。他国民との差異がイデオロギーとして植え付けられ、国民意識が生まれた。フィリピンには、「先進国」とはまるで規模の違う多民族、多言語、多文化がある。それらをひとくりに「フィリピン文化」としてまとめてしまうのは、わたし = 複雑、他人 = 単純の典型である。国民文化なんでものは虚構の「独自性」であると思う。

このような国家の洗脳を振り切るためにも、また人は出身、民族、言語に関係なく人であるという希望から、「日本人」という肩書きを振り払おうと思った。

国境を越えてフィリピンに来た。しかしそこで聞いた「先住民族」の話に、日本占領期のことがよく出てきた。あのときは「本当に怖かった、腰が抜けて動けなかった」、「日本人は残酷だった」、また私を気遣って「ひどかったのは日本兵ではない、韓国兵だ」という人もいたが、どれも自分が「日本人」として見られていることがわかった。「日本人」を越えようと意気込んで国境を越えたが、やはり「日本人」という肩書きはついてきた。80年代にミンドロ島のマンヤン族の一つであるタジャワン族を調査していた現在、静岡県立大の小幡先生

は、「日本人は出て行け」といわれ、それに従わざるをえなかったという論文をみた。そのような待遇にあわなかっただけでも、筆者はラッキーだった。

日本兵による悲惨な記憶を持ち続けている人に対し、自分は「日本人」ではないので関係ない、と言えるだろうか。それは他のアジアの国々で日本兵に利用された、強姦された、殺されたという人々を目の前にしても言えることではない。中野先生の言葉を借りれば、だれが「戦後」と勝手に決めたのだ、今でも「戦中」のなかを生きている人がいるのだ、ということである。

わたしが無垢に志した「日本人」を越えるということは、裏を返せば「日本人による歴史」を都合のいいように忘れること、あるいはねじまげることの危険性をはらんでいるのではなかったか、と思う。この点は昨今の歴史修正主義者たちの「新しい教科書をつくる会」と共通しているのではないか。ナショナリストたちによる都合のいい歴史解釈とわたしのやっていたことが重なる危険性があったのだ。

「日本人」という肩書きは、どこまでもついてきそうだが。しかしだからといって「日本人」で安住したくはない。それは「日本人」の持つ第3世界、あるいは「先住民族」の第4世界に対して優位な位置から降りていけない限り、「抑圧者」あるいは「植民地主義者」としてしか、かれらと関わっていけないと思うからだ。

むすびに

以上のように、本稿では4章に分けて「フィリピン先住民族」をめぐる旅について論じてきた。本論1では、筆者がなぜ再びアエタ族の村を訪ねようと思ったのか、その動機を書いてきた。筆者が植民地主義者として先の2回の訪問でアエタ族の抑圧に加わったことの反省から、今度はアエタ族の話を聞きに、そして出会いたいと思ったからだ。

本論2では、実際の滞在中に筆者が、どのように先住民族と関わったのかということ論じた。短い時間、言語の違い、そして筆者とは構造的にまったく異なった生活空間で生きている人々と共通の話題を見つけにくかった。今、思い出せば唯一の共通の話題といえば、「女」の話だった。そのような話すことの難しさを痛感し、そしてそれ以上、何もできなかった。この章は、ほかの章と比べて文量的にも少ないことから、実際の滞在中では筆者はほとんど何もできなかったのだと今、思う。

本論3では、そのような薄っぺらい出会いしかできなかった筆者ではあるが、先住民族と生活したことの「武勇伝」を自慢げに周りの人たちに語っている。その場を先住民族が目当たりにしたら、不快感を抱くと思う。筆者は自己満足のために、かれらの日常をダシにしているのだ。それはわたしが事実だと思い込んでいる物語を、果たしてこの物語を自分とは「違う」人たちが見たとき、果たして共有できるのか、という問題である。現場は出来事と出来事の整合性のない、いわば断片的なものである。そのような断片的な出来事を編集することで、ここで誰に視点によって編集されているのか、ということが大きく影響してくるが、ひとつの物語を作り出している。筆者は先住民族の生活で面白いこと、

奇異なことを中心に取り上げ「武勇伝」を編集した。果たして筆者の視点は誰の視点なのだろうか、そして先住民族に対してどのような立場からその物語を編集しているのだろうか。このことを考え続けていくことは好奇心を駆り立てる。その理由は、「先住民族」という他者と関わっていくことによって、自分が果たしてどのような社会に生きているのか、自己の客観化ができるのではないかと、思うからである。つまり今まで当たり前だと思っていたことが、覆されてしまうのである。

本論 4 では、冒頭でも断ったが、ほかの章とうまく関連させて展開することができなかつた。しかしここで論じたことは、筆者の脱日本人という希望であり、それなくして学問をやっていくわけにはいかない、という想いである。しかし無垢に日本人を越えたと錯覚してしまうことは、歴史の忘却、都合いい解釈につながる危険性を大いにはらんでいる。自分は日本人を越えたとおもっても、他者の視線は異なる。それを先住民族との関わりの中から発見した。日本人を越えることと日本人を越えられないことの狭間に立たされた筆者の立場が先住民族と関わることで浮かび上がってくるということが、今回の旅で明らかになった。

文献目録

上村英明

2001 『先住民族と「近代史」』 平凡社

太田好信

2001 『民族誌的近代への介入』 人文書院

岡 真理

2000 『記憶/物語』 岩波書店

佐藤郁哉

2002 『フィールドワークの技法』 新陽者

玉置泰明

1999 「第 7 章 都市周辺世界を生きる」、青柳清孝、松山利夫編 『先住民と都市 人類学の新しい地平』:104-119 青木書店

鶴見良行

1993 『ナマコの眼』 ちくま学芸文庫

西川長夫

2001 『増補 国境の越え方』 平凡社ライブラリー

中川 敏

1992 『異文化の語り方』

橋爪大三郎

1988 『はじめての構造主義』 講談社現代新書

アンダーソン、B.

1997 『増補 想像の共同体』 白石さや、白石隆訳 NTT 出版

サルトル、J-P

1951 『嘔吐』 白井浩司訳 人文書院

サルトル、J-P

1952 『文学とは何か』 加藤周一、白井健三郎、海老坂 武訳 人文書院